

オガーレス・プロビデンシアの支援
— 参与観察と聞き取りから —

小松 仁美

清泉女学院短期大学

**Practical Examples of Hogares Providencia for Street
Children Assistance : Based on Participant Observation
and Interview Survey**

KOMATSU Hitomi

Seisen Jogakuin College

1. はじめに

メキシコ合衆国（以下、メキシコ）はスペインに植民された歴史的経緯を背景としながら、現在においてもスペイン語圏において非常に多くのカトリック教徒を抱える国の一つである。週末を教会で過ごす熱心な教徒から、洗礼や門前市がたつ時にのみ教会を訪れる信者まで、その信仰における態度や価値観にはグラデーションを含む。また、グアダルーペ信仰や死者の日など多分にメキシコ的なものを内包しながら、カトリックは多くのメキシコ市民にとって日常生活の一部をなすものとなっている¹。

¹ もちろんカトリック以外の宗教を信仰する人々にとっては、このような生活状況およびこうしたとらえ方そのものに疑義を含むであろう。

カトリックが宗教的意味合いを超え、日常生活の一部をなしながら社会的文脈を帯びるとともに、社会生活を営む上での基盤の一部を成していることについては、援助においても例外ではない。メキシコの援助実践においては、カトリックがその一翼を担っている。

市民による寄付や寄贈といったチャリティー活動から、日本のNPOにあたる民間支援団体（Instituciones de Asistencia Privada）の創設に教会や神父や信者が関わるなど、メキシコにおける支援の枠組みは、カトリックと切り離して考察することは難しい。加えて、カトリック信者の被援助者に対しては、ミサや洗礼など信仰が継続されるように援助する施設も少なくない²。

メキシコにおける援助を捉えようとするとき、法・制度の枠組みやソーシャルワークの展開といった研究はもちろん重要であるが、同時に、社会的文脈として位置づく信仰を切り離して検討することは援助の理解を阻害することになりかねない。全ての援助者、被援助者がカトリック教徒ではないため、信仰を分析の主たる枠組みとして、信仰を前提とした考察は乱暴と言わざるをえないであろう。

そこで本稿では、メキシコにおける援助実践の一つとして、カトリックの一神父により設立された民間支援団体オガレス・プロビデンシア（Hogares Providencia, IAP.）を取り上げ、援助の法制度的位置づけや支援体系などを踏まえ、その援助実践について報告する。援助実践を支える信仰や宗教的価値との関連の試論的な考察を通して、支援における信仰の意義について考えたい。

² たとえばカサ・ダヤ（Casa DAYA）では幼児洗礼を受けさせたい母親や洗礼を受けたい児童自身のために必要な段取りを踏み、グアダルーペ寺院や地域の教会での洗礼に職員が同行する。また、2000年代初め、カサ・アリアンサ（Fundación Casa Alianza México I.A.P.）内に開所されていた HIV-AIDS の発症者の看取り施設ルナ（Luna）では、入所児が日々、マリア像に祈りを捧げ、神父が告解を聞くなどして終末期の支援を行っていた。

2. 民間支援団体におけるオガレス・プロビデンシアの位置づけ

2-1 民間支援団体の概要

メキシコ合衆国において、NGO・NPOに当たる組織・団体には、主としてA.C.(Asociación Civil;財団法人)³と民間支援団体がある。A.C.は、その活動は文化、教育、スポーツなど多岐に渡るため、全てが援助団体ではない。その他に無認可団体が多数存在しており、数の上ではA.C.や民間支援団体を凌駕していると考えられるものの、その実態把握は困難である。

民間支援団体は、J.A.P.(Junta de Asistencia Privada del Distrito Federal;連邦区内の民間支援団体会議)⁴に登録され、名称、所在地、設立年、ミッション、活動領域などが登記簿に記載される。毎年、報告書の提出義務があり、登録内容から乖離する活動は行なえない。J.A.P.によってデータベース化されており、包括的に実態把握が可能なおうえ、活動実態が担保されることから本稿では民間支援団体を取り上げる。

J.A.P.に登録される民間支援団体は、2006年時点⁵において504団体あり、活動内容ごとに6つに分類される。6分類とそれぞれの団体数は、以下の通りである。

「教育支援 (Atención Educativa)」は89団体、「依存、障害とリハビリ (Adicciones, Discapacidad y Rehabilitación)」は73団体、「児童 (Atención a Niños y Jóvenes ; 子どもと青少年への支援)」は64団体、

³ 支援団体を分類し分析するためには登記簿の閲覧を要するが、閲覧費用の観点から、全体把握を行うことが難しい。

⁴ メキシコ連邦政府の特別管轄下に置かれる民間支援団体の管理組織である。(http://www.jap.org.mx/, 2007年10月30日参照)。

⁵ メキシコのストリートチルドレンは、2010年頃に未成年のホームレスとして制度的位置づけが変更された。加えて、連邦区 (DF) が、2016年に行政区分をメキシコ市に変更した。毎年データは更新されるため、その年度の運営状況がわかるものの、活動停止・閉園などすると当該団体の情報は削除される。制度変更以前の手に保管している全団体の最も新しいデータが2006年で、そのデータを2019年度に補完している。

「医療支援 (Atención Médica)」は 59 団体、「高齢者支援 (Atención al Anciano)」は 45 団体であり、これらに分類できない「その他 (Otra clase de Servicios Asistenciales ; その他の社会福祉サービス)」は 174 団体と最も多かった。

民間支援団体の設立の動向は、全体としては 1980 年代に入って設立が相次ぎ、1990 年代に設立ラッシュを迎える。分類別の設立件数推移をみると、「教育支援」と「その他」は 1900 年代初頭から設立され、全体の設立件数推移と重複する。「高齢者支援」と「医療支援」は全体の設立件数推移とほぼ重なりつつも、「高齢者支援」は 1900 年代初頭から 1940 年代半ばと、1970 年代後半以降に設立されている。これに対して、「医療支援」は、1980 年代以降に集中して設立されている。「児童」は「子どもの権利条約⁶」以降に設立が相次ぎ、1990 年代に設立が集中している。「依存、障害とリハビリ」も 1980 年以降に設立されるようになり、とりわけ 1990 年代後半に設立件数が集中している。これには、薬物の流通および障害者支援の動向が関連すると考えられる。

2-2 ストリートチルドレン支援の民間支援団体の位置づけ⁷

民間支援団体数は年度により、施設の開設、統合、廃止などにより増減している。これらの民間支援団体のうち、J.A.P.の登録簿にストリートチルドレン支援を活動対象あるいは活動領域に明文化しているのは、2006 年時点で表 1 に示す 15 団体である。うち 13 団体が「児童」であり、2 団体は「教育支援」であった。なお、2019 年時点において 14 団体に減少している。

15 団体のうち、ストリートチルドレンを主たる活動対象として定めて設立されているのは、オガーレス・プロビデンシア、EDNICA、プロテクション・デ・ラ・ニニェス (Fundación para la Proteccion de la

⁶ メキシコは、1990 年 9 月 21 日批准。

⁷ 本節は 2007 年 11 月 10 日中間組織研究会において報告した内容および小松 (2019) に基づく。

Niñez)、テアトロ・カジェヘロ (Programa de Teatro Callejero)、プロ・ニーニョス (Fundación Pro Niños de la Calle)、カサ・ダヤ (Fundación Dar Y Amar (Casa DAYA))⁸、カサ・デ・ラス・メルセー (Casa de las Mercedes) の7団体である。

表 1 メキシコ市におけるストリートチルドレン支援団体一覧

設立年	活動領域	民間支援団体の名称	市内での2014-2018年のストリートチルドレンの支援活動とその実績		
			保有・運営施設数	対象者	支援実績
1918	児童	Fundación Clara Moreno y Miramon	1箇所の定住施設を運営	4-17歳までの女性	毎年平均70名を支援
1979	児童	Hogares Providencia	10箇所の定住施設を運営	ストリートチルドレンとその予備軍	2018年は269名を支援
1982	教育	Casa de los Niños de Palo Solo ^{*1}	2箇所の定住施設を所有	子ども	650名以上へ教育支援を実施
1988	教育	Centro de Educacion Infantil para el Pueblo ^{*2}	不明	10ヶ月-6歳の主に就学前児童	2015年は75名へ教育支援を実施
1988	児童	Fundación Casa Alianza México	6箇所の定住施設を運営	12-18歳までの男女	約120名を支援
1989	児童	Fundación Emmanuel ^{*3}	1箇所の一次避難施設と複数の定住施設を運営	不明	不明
1989	児童	EDNICA	3箇所の施設を所有	ストリートチルドレンとその予備軍	319名を支援
1990	児童	Fundación Dejamé Ayudarte	1箇所の定住施設を運営	不明	不明
1990	児童	Fundación para la Protección de la Niñez	1箇所の施設を所有	ストリートチルドレン支援団体を含む各種団体	2015年は550団体以上に資金援助
1992	児童	Programa de Teatro Callejero	1箇所の施設を所有	10-17歳のストリートチルドレンを含む青少年	演劇を通じて支援
1993	児童	Fundación Pro Niños de la Calle	各1箇所、デイセンターと一時定住施設 ^{*4} を運営	ストリートチルドレンと路上で成人年齢に達した若年層ホームレス	152名を支援
				その家族	29家族を支援
1993	児童	Ayuda y Solidaridad con las Niñas de la Calle	2箇所の施設を所有し、うち1箇所は定住施設	2-20歳の子どもおよび青年	不明
1994	児童	Fundación de Apoyo a los Programas en Favor de los Niños de la Calle de la Ciudad de México	2箇所の施設を所有	個人および団体	主に経済的な支援
1997	児童	Fundación Dar Y Amar (Casa DAYA)	1箇所の定住施設を運営、定住施設に隣接した保育所(一般利用可)を運営	13-16歳のストリートチルドレンとその予備軍の妊娠期を含むシングルマザーとその子ども	8-20組の母子を支援
2001	児童	Casa de las Mercedes (旧、Fundación Casa de las Mercedes)	2箇所の定住施設を運営	女子のストリートチルドレンとその予備軍	不明

JAPDF および各民間支援団体の HP に基づき、聴き取りによる情報を補足して筆者が作成した。

*1 メキシコ州にて定住型施設を1か所運営。

*2 2006年には登録されていたが2019年には登記上存在しなかった。

*3 グアダラハラ、グアナファトなど17州で支援活動を展開している。

*4 一時定住型施設は定住型施設利用が困難な年長者の自立に向けて、2009年に運営が開始された。

⁸ 2006年時点では独立していたが、2019年時点では他の民間支援団体の傘下に入っている。

本稿が取り上げるオガレス・プロビデンシアは、現在ストリートチルドレン支援を行う団体としてはメキシコで2番目に古くから存立しており、ストリートチルドレン支援を専門とする団体としてはメキシコで最初に設立された団体である。

国際人道問題に関する独立委員会 (ICHI) がストリートチルドレン問題を取り上げ、報告書を発行したのは1986年 (Agnelli S.) のことであり、ブラジルの哲学者であり識字教育を推進したパウロ・フレイレがストリートチルドレン支援について『ストリートエデュケーション (Educadores de rua)』を発行したのが1989年である。オガレス・プロビデンシアが、いかに早い段階でストリートチルドレン支援を開始したかが伺えよう。

2-3 オガレス・プロビデンシアの設立⁹

オガレス・プロビデンシアは、アレハンドロ・ガルシア・デュラン・デ・ララ神父 (Padre Alejandro García Duran de Lara、1999年没)によって1979年に設立されたストリートチルドレン支援を行う民間支援団体である。支援を開始したころの神父は、ひげを蓄え、「チンチョマ (Chinchoma=毛のない頭)」であったことから、ストリートチルドレンがチンチョマと呼び始め、それがなまり、チンチャなどに変容しながら、多くの人々から親しみを込めてチンチャチョマ神父 (Padre Chinchachoma) と呼ばれるようになった。

施設のシンボルには、神父の肖像とともに、抑圧から解放されて尊厳をもって生きる喜びを発見する子どもたちの姿が描かれており、亡きあとも、神父は施設の精神的支柱として息づいている。

神父は、1935年にスペインのバルセロナで生まれ、貧しい人々、子どもと若者に対する教育を行うエスコラピオス修道会¹⁰に属し、

⁹ <https://hogaresprovidencia.org.mx/index.html> (2023年7月12日閲覧)

¹⁰ 聖ヨセフ・カラサンスによって設立され、当時貴族だけのものであった教育を一般大衆や貧しい者の子どもたちに無償で提供し、その学校を「学校」を意味する「schola」と「慈悲」を意味する「pia」というラテン語か

メキシコ市から西へ車で1時間半ほどのところに位置するトラスカラ州に教員として働きはじめ、メキシコでの宗教家としての活動を開始した。その後、いくつかの地で司祭や校長などの役職を経た。こうした宗教生活のなかで壮年期に差し掛かる頃、プエブラ市の通りで暮らすストリートチルドレンに出会ったことをきっかけとして、支援を志すようになった。

この志が実践的な支援として本格的に始動したのは、1975年以降のことである。メキシコ市でストリートチルドレンと再び出会ったことをきっかけとして、彼は自宅にその子どもたちを招き入れて、個人として子どもたちと多くの時間を過ごし、良き相談相手となっていた。

当時を知る者¹¹は、チンチャチョマ神父の自宅にあるものを持ち去るストリートチルドレンがいても、それが必要だったのだろうと、神父はその子どもをゆるし、再び自宅に招き入れたことや、麻薬やたばこを吸うストリートチルドレンがいれば「それはあなたの体を痛めつける行為だ」と言葉で諭すのみならず、子どもたちがわかるように自らの体に火のついたたばこを押し当てるなどして、それがどれほど自分の体を痛めつけることなのかを身をもって呈し伝えた。

ストリートチルドレンは、かかわりを通じて人生で初めて他者から自分を大切にされる経験をした。徐々に神父に心を開き、自らの生い立ちなどを語るとともに、人のものを大切にしようとするようになり、自分の体を大切にしようと薬物をやめるよう努力し始めた。

神父は、劣悪な家庭環境に置かれてきた子どもたちの状況を知り、心を開き、立ち直ろうとする子どもたちの姿に、支援を必要とするストリートチルドレンに援助を届けるべく、教会や信者との対話を

ら「スコラ・ピア」としたことに由来する。

¹¹ 2001年8月、2002年8月、2003年8月に「ストリートチルドレンを考える会」主催のNGO訪問プログラムを通じてオガーレス・プロビデンスシア内で当時を知る職員および子どもたちから聞き取りを行った。

通して支援団体の立ち上げに奔走し、人々、企業、政府の支援を得て 1979 年 11 月 29 日にオガレス・プロビデンシアを設立した。

ミッションを「ストリートチルドレンの基本的権利を回復し、適切な栄養、教育、身体的および精神的発達を提供し、人間としての価値を回復する機会を与えること」とし、ヴィジョンを「尊厳ある人間らしい生活を送る機会を持たないストリートチルドレンや若者がオガレス・プロビデンシアに居場所を見つけ、愛、自由、安全の新たな道を見つけられるようにする。さまざまな研修やオリエンテーションのプロセスを通じて、彼らが社会にうまく溶け込めるようにすること」としている。

チンチャチョマ神父は設立後、施設運営のために奔走し続け、支援を必要とする子どもたちのために、住まいを拡充する等し、最盛期には 400 名近い子どもを援助するまでに至った。神父は、1999 年に亡くなるが、それまでの間、精力的に運営にかかる費用集めを行うばかりではなく、子どもたちに直接的にも間接的にもかかわり続けた。子どもたちが「自分が価値ある人間であること」を知るための紙芝居や絵本などのいくつもの教材を自ら作成し¹²、子どもたちについての知見や考えをまとめた書籍も多数、世に送り出している。

3. オガレス・プロビデンシアの援助

3-1 オガレス・プロビデンシアの援助の枠組みと実践

以下では、『2022 年年次報告書』に基づき、今日のオガレス・プロビデンシアの援助の概要を述べる¹³。支援は、路上生活を送っている子どもにアプローチする段階、それらの子どもたちが施設での定住生活を通して社会に統合されていく段階の 2 つに分かれている。

¹² 多くの人々が忌み嫌うようによけて歩いた道の中央に転がった動物のフンの中にはダイヤモンドが隠されていたという紙芝居は、当時の子どもたちにとって非常に人気の教材となり、繰り返し読まれた。

¹³ <https://hogaresprovidencia.org.mx/libro/Informe-anual-2022.pdf> (2023 年 8 月 10 日参照)

前者では、子どもたちが路上に出るに至った背景を知り、路上で暮らし続けられる要因を排除して援助へとつなげるストリートエデュケーションが実践される。健康、居住、食品、衣類、レクリエーション、文化、スポーツなど多岐にわたる支援を通じて定住型施設支援への関心を引き出し、あわせて子どもたちに必要とされる心理的、教育的、家族への介入支援などが行われる。

後者では、前者の活動を受けて、路上生活をやめたいと決断した子どもたちに対して、子どもたちが子ども期を家族のもとで過ごせることを目指すファミリーモデルを基盤として、以下の4つの支援が展開される。

家族支援： 家族が子どもに対して責任を負えるように、親のケアと子育てスタイルに関するスキルと知識の獲得を促す

定住型施設： ホームレス状態にある子どもたちの権利の回復と、対人関係や家事などのソーシャルスキルの獲得を促す

自律生活： 自律に向けてソーシャルスキルや就業に必要とされる力など個人のスキルの獲得を促す

家庭生活： 愛情あふれる家庭への復帰を通じて、安定性、安全性、永続性、権利の完全な行使を提供する

これらは、人権に基づくアプローチである。子どもの権利に規定されるように、子どもにとっての家族の重要性を踏まえて、家族の再統合が積極的に目指されていることが読み取れよう。つまり、家族が、たとえ子どもたちを路上に押し出す原因を作った暴力や著しい貧困等の課題を抱えた状況にあったとしても、その家族が子どもたちを再度、自らの家庭に受け入れられるように支援し、家庭環境が整い、家族が安定的な生活を手に入れるまでのあいだ、子どもたちを安全な定住型施設での保護と成長を促す援助を通じて、家庭復

帰を第一義的目標としながらも、家庭が整わない場合は自立の道を用意していく現実的な援助が展開されている。

定住型施設支援¹⁴の中で、家事などのスキルの獲得は、自立時にも役立つのみならず、復帰先の家庭においても、相当に女性世帯主世帯への統合、多子家庭への統合が予想されることから、家族との良好な関係性を維持するためのスキルの一つとして求められる。「自分のことを自分でできる」のみならず、お手伝いとして就学や心身に負担がかからない範囲において「幼い兄弟」や「仕事で疲れて帰ってくる母親」を支えることができることも重要となっている¹⁵。

ストリートチルドレンを生み出す家族を子どもにとって理想的な状況に近づけるにはあまりにも多くの資源と時間を要することから、家族だけに歩み寄りを促すのではなく、子どもたちを家族に近づけていく支援をあわせて行う点に、オガレス・プロビデンシアの支援に一つの特徴がみられよう。

ファミリーモデルを基盤とするオガレス・プロビデンシアの包括的支援モデルのなかで、利用児の健全な統合的発展と最適な社会

¹⁴ オガレス・プロビデンシアの定住型施設は、入所人数こそ多いもののグループホームのような形態がとられており、特定の職員が子ども同士の関係性の構築や維持はもちろん、寝食を共にしながら家事援助、通学支援など多岐に渡る生活支援を行っている。

オガレス・プロビデンシアに限らず、メキシコでは全般的に小舎制、家庭的養護に近い援助形態がとられているが、これは子どもにとって家庭的養護が重要であるという価値とならんで、住み込み労働者の人件費が比較的安価であるという社会背景にもよる。住み込み労働者のなかには子どもたちと近い社会経済状況に置かれる者がおり、成人後の生活のロールモデルとなる、お互いの生活状況の近しさからの親近感からよき相談相手となる、自立後の生活をイメージした援助の展開がしやすいなどのメリットがあり、円滑な援助につながっている。

¹⁵ ストリートチルドレンの置かれた状況や、彼らを生み出す主たる社会階層の都市下層の生活については小松（2013、2018）、COESNICA（1992）などを参考のこと。

的包摂を目指して定住型施設は運営されている。定住型施設は4か所あり、サン・ホセ・デ・カランサ乳児院¹⁶、ソンリサ・ホーム¹⁷、児童養護施設アレグリア¹⁸、サン・イグナシオ・デ・ロジョラ・ホーム¹⁹が展開されている。定住型施設では、ヘルスケア、レクリエーション、教育支援、栄養学的アプローチ、心理学、精神性（もしくは信仰 Espiritualidad）、自立支援、法的支援などが提供される。

2022年には、女児59名、男児54名の合計113名の利用児を対象に定住支援がされるとともに、20家族への支援が展開された。宿泊、朝晩の軽食を含む1日5回の食事、検査と専門的治療を行う医療的ケア、グループセラピーと個別療法、水泳や映画などのレクリエーションなど、様々な支援が展開された。

3-2 オガーレス・プロビデンシアの援助実践から

オガーレス・プロビデンシアは、チンチャチョマ神父亡きあと、規模を縮小させてきたとはいえ、現在においても100名を超える児童の保護と家庭復帰を支えている。メキシコのストリートチルドレン支援の要となる援助団体の一つといえよう。

また、メキシコ国内においては最も早い段階から、おそらく世界的に見てもストリートチルドレン支援の創成期にあたる非常に早い段階でオガーレス・プロビデンシアは援助をはじめている。チンチャチョマ神父は個人的に子どもたちに自分の家を提供し、子どもたちに関わりながら彼らが必要とする援助を手探りで開始した。

チンチャチョマ神父は、子どもたちに対して、一方的に叱ったり、正しいやり方を押し付けたりするのではなく、どうして子どもたちがそうしたのかを聞き、時に回答の出ない質問に、そうした行為が子どもたち自身の心身にどのような影響を及ぼすのかを伝えて考え

¹⁶ 新生児から5歳までの男女を援助する定住型施設。

¹⁷ 6～11歳までの女児のための定住型施設。

¹⁸ 6～18歳までの男児のための定住型施設。

¹⁹ 12～18歳までの女児のための定住型施設。

るきっかけをあたえ、子ども自身が考える時間を設けた。子どもたちが自分の将来について、今の行いを含めてどうするのかを決断するのを神父は根気強く待った。ともに歩むことで子どもたちは、自分がストリートチルドレンという汚く、粗野で、危険な存在ではなく、遊ぶことが好きで大人に愛されたいと願う「普通の子ども」であることに気が付き、子ども自身に変化していく実践がされていた²⁰。

この実践から、子どもたちに愛情深く接する大人の必要性や、子どもたちにとって家族が大事であることなど、様々な気づきを得て、援助が形作られ、オガレス・プロビデンシアとして組織化されるなかで実践が深め、広められた。

実践で得られた知見は、チンチャチョマ神父が書籍等にまとめるとともに、教会の内外へと子どもたちへの援助の必要性を説いて回することで、メキシコにおけるストリートチルドレン支援の実践の基盤となった。

このオガレス・プロビデンシアの援助は、ストリートチルドレン支援の基本的な方法論とも符合する。ストリートチルドレン支援の中核をなすストリートエデュケーションは、フレイレがその骨子をまとめたこともあり対話を重視しているが、オガレス・プロビデンシアにおいても子どもたち自身が自分で決断して定住型施設にとどまれるよう、愛情深い献身と対話を重視している。子どもたちのライフプランは、自身が参加しながら決定していくプロセスが用意されているのである。

オガレス・プロビデンシアの援助実践は、多分にしてチンチャチョマ神父の援助の方針、実践を拠り所とし、彼の実践がメキシコのストリートチルドレン支援の根底に流れていることを考えると、神父の人となりはもちろんのこと、エスコラピオス修道会の一員としてメキシコに赴任して長きにわたり教育活動に従事してきた経験

²⁰ このチンチャチョマ神父の実践が、自律生活の援助に受け継がれている。神父亡きあとも、子どもたちのオートノミー、決断を非常に重要視した関わりかけがされている。

などが多分に援助に影響していると考えることができよう。

オガース・プロビデンスでは、支援観のなかに、「幼少期に植え付けられた価値観が人の行動と発達を導く」との認識を示している。だからこそ、愛情深く、対話を通じた援助を実践しているのであるが、この支援観は、エスコラピオス修道会が発足したきっかけとなる幼い頃からの教育の重要性という点に通ずるものがある。

3-3 オガース・プロビデンスが重きを置く価値

オガース・プロビデンスの援助を、宗教的価値観を全く排除して捉えることは難しいように思える。そこで、オガース・プロビデンスの価値的な部分に歩み寄り、考察を深めたい。

2-3 の「オガース・プロビデンスの設立」にて先述したミッションやヴィジョンのもと、オガース・プロビデンスは以下の5つの価値を重視して援助にあたっている²¹。

愛 (Amor) : 利用するすべての人々に対する無条件の受け入れと対話

尊厳 (Dignidad) : 定住型施設を利用するすべての人々に対する尊厳ある平等な扱い

友愛 (Fraternidad) : 敬意、分かち合い (apoyo) と共感 (comprensión) 。定住型施設内のいかなる人に対しても排除や差別はない

公平 (Justicia) : 最高の倫理基準に基づく誠実さ (integridad) と正直さ (honestidad) を示す

解放 (Libertad) : 自分自身とその仲間に対する、独立した、敬意を持った、合理的で

²¹ <https://hogaresprovidencia.org.mx/mision.html> (2023年8月10日参照)

献身的な行動の実践

これらの価値を援助のなかで個々の利用者に内面化させることを通して、つまり、こうした価値を伴った成長を促す援助を通じて、自律に向けていくことをオガレス・プロビデンシアでは重視している。ともに他者とあること、その他者を尊重し大切にするとともに、自分も大切にされること、そのために正直であることや常に対話を行うことが互いに交互作用し、循環しながら巡らせることを重視していることがわかる。

これらの価値の背景には、イエスが人々を愛したように無償の愛を利用者に向け、同時に、イエスが人々を愛したように利用者も援助者もお互いがお互いを愛し合う宗教観や、自分自身を愛するように隣人を子どもたちを愛してきた神父の実践が息づいているのではないだろうか。

愛や誠実、共感を示すことは、必ずしも宗教的価値だけによるものではないであろうが、宗教者として長年、信仰の道を歩んできた神父の残した言葉である。単なる言葉ではなく、信仰の徒となり、苦難を抱える人々のあいだにわけいって、教鞭をとり、苦しさを分かち合いながら一人一人の子どもたちを救おうとしてきた神父の掲げた「愛」や「誠実さ」にはその言葉以上の響きを持った価値が含まれていたことであろう。

だからこそ、多くの子どもたちが心を開き、愛されることを受け入れ、他者を愛することのできる一人ひとりに生まれかわれるのであろう。チンチャチョマ神父によって救われたことを機に、同じ境遇にある子どもたちを救うべくオガレス・プロビデンシアのストリート・エデュケーターとなった職員もおり、神父の思いや援助の基盤となる価値は現在も引き継がれている。

4. むすびにかえて²²

本稿では、メキシコにおける援助実践の一つとして、エスコラピオス修道会の神父により設立された民間支援団体オガーレス・プロビデンシアを取り上げ、その実践を紹介した。子どもの権利を重視したファミリーソーシャルワークの展開とともに、社会状況、出口を意識したリービングケアが実践されているなど、オガーレス・プロビデンシアのストリートチルドレン支援は、ソーシャルワークの実践として価値ある実践がされていることがわかる。

この実践の背景には、神父が培ってきた宗教者としての価値、行動が内面化されているものと考えられた。しかしながら、宗教的価値をいかに考察していくかの方法論を持ち合わせず、援助実践と信仰とのあいだの検証は十分にできなかった。

最後に、オガーレス・プロビデンシアのHPを開くと、最初に「他者を助けることは自分を助けることと同じである」「助けること以上に満たされることはない」「あなたは今日から彼らの人生を変えることができる」という3つのメッセージが表示される。これらは、ドネーションを求める言葉として機能的であるが、神父の生き様に触れ、短期的ではあるが実際のオガーレス・プロビデンシアの援助に触れる機会を得た筆者には、神父が説きたかった愛、信頼、分かち合いといった生き方を示す願いが込められているように感じる。それらの文章がもつ真の意味を理解していくためにも、宗教的な視座に基づく理解が必要とされていると思い、今後の課題としたい。

²² 本学に赴任して、聖心侍女修道会を知り、宗教行事等に触れるたびに、徐々に、これまで理解の及ばなかった民間支援団体の実践を支える信仰そのものの意義を感じるようになり、これまで実践者の方々がお話くださった一つ一つの言葉が腑に落ちるような感覚を味わっている。現状、宗教に関する知識は全く伴っていないものの、カトリック圏における援助の理解を深めていくためには、宗教的な視座を必要とすることが体感的に理解されてきた。こうした出会いに感謝しながら、改めて支援についての理解を深めていけるよう、ソーシャルワークの枠組みだけでなく、それを取り巻く信仰についても学びたいと考える。

参考引用文献

- Agnelli S. 1986, *Street Children : A Growing Urban Tragedy*, London ; Weidenfeld & Nicolson Ltd
- Comisión Para el estudio de los Niños Callejeros, 1992, *Ciudad de México : Estudio de los Niños Callejeros*, COESNICA.
- Desarrollo Integral de la Familia(DIF), 2006, *Children of the street a la Vida en el Distrito Federal, México*, Desarrollo Integral de la Familia.
- , 2004, *Programa de Prevención y Atención a Niñas, Niños y Jóvenes en Situación de Calle “Children of the street a la Vida” Marco General de Operación*, México, Desarrollo Integral de la Familia.
- Freire,Paulo, 1989, *Educadores de rua*, Bogotá : UNICEF.
- 小松仁美, 2013, 「ストリートチルドレン支援における近代的孩子観の表出——定住型施設・ダヤの支援過程を通して」『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』第20号 : 77-94.
- , 2018, 「メキシコ市における都市下層の子ども期とストリートチルドレン——都市下層の生活史から」『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』第25号 : 77-94.
- , 2019, 「メキシコ市におけるストリートエデュケーションの構造——ストリートエデュケーションの理論と実践枠組み」『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』第26号 : 115-131.
- Luis Otero, 1999, *Los Niños en la Calle y de la Calle : Problemática y Estrategias para Abordarla*, México , Academia Mexicana de Derechos Humanos.
- 菅田浩一郎, 2018, 「エスコラピオス修道会創設の史的位置づけと意義:聖ヨセフ・カラサンスの教育実践と霊性」『常磐大学総合政策学部紀要』(1):69-96.